令和元年度企画展

オビシャはつづくよ４００年

～年のはじめの村まつり～

千葉県各地や利根川・江戸川・荒川流域の農村部では、１～２月にかけて「オビシャ」と呼ばれる行事が盛んに行われています。元来は弓矢で的を射る儀礼であったといわれますが、弓射以外の多様な儀礼も見られます。その年の祭祀を仕切る「トウヤ（頭屋）」と呼ばれる当番は、古くから引き継いだ文書にその年の仲間の名や出来事を書き足して、次の頭屋に引き継ぎます。こうして書き継がれてきた「オビシャ文書」のうち、江戸時代初期より続くものが最近次々と「発見（へんせん）」され、これまで分からなかった年間の関東におけるオビシャの成立と変遷の様相が少しずつ明らかになってきました400。

本企画展では、弓射の的や美しい造形物、そして初期のオビシャ文書を一堂に集めて紹介します。

これまで一度も「オビシャ」という言葉を聞いたことがなかった方も、逆に「毎年うちのほうではやっているよ」という方も、一緒にオビシャの謎（なぞ）を解いていきましょう。

Ⅰ 名前の謎　～ オビシャという呼び方 ～

新宿区中井御霊神社備射祭絵馬

中井御霊神社蔵

オビシャを漢字で書くと、御奉射、御歩射、御奉社、御備社、御毘沙、産社などさまざまに表記されます。

日本民俗学の父といわれる柳田國男は、関東のオビシャについて、「農作業の始まりに先立って年を祈り、弓を射て神意を伺う式である」と述べ、「歩射（ぶしゃ）」という武芸を奉納したのが元の形である、としました。実際には弓射を伴わないオビシャも多いのですが、それらは元来の歩射の祭りの形態が崩れたものだ、と考えたのです。果たして本当にそうなのでしょうか。

この章では、今一度原点に立ち返り、オビシャという名前と弓射儀礼の関係について時代を追ってみていきます。

Ⅱ 地域差の謎 ～オビシャ以外の奉射行事～

今堀日吉神社弓始め式祭壇

写真提供：山本冨夫氏

年のはじめに村人が集まり、神前で弓射を奉納する行事はオビシャだけではありません。同様の弓射行事は、全国各地で行われています。

近畿地方の「結鎮（けちん）」、中国・四国・九州地方の「百手（ももて）」といった行事は、南関東のオビシャと同じく、広範囲に渡って同じ名前で呼ばれる、年頭の弓射行事です。

また、関東の中でも、こと南房総や北関東においては、オビシャと呼ばない弓射行事が行われています。

この章では、一見同じようにみえるのに、名前の異なる各地の弓射行事について、いくつかの実例を見ていきます。

Ⅲ 組織の謎 ～オビシャは誰と行うか～

印西市浦部の鳥マチ備社

現在行われているオビシャの多くは集落単位で行われ、各家が順番に持ち回りで「トウヤ」などと呼ぶ当番制のヤドになって、その年一年の引き継ぎ文書等の管理と祭祀を取り仕切ります。また、更に細かい区分である「ツボ（坪）」とか「クルワ（曲輪・郭）」と呼ばれる、家々の集まりや、イッケなどと呼ばれる同族組織によって行われる場合もあります。

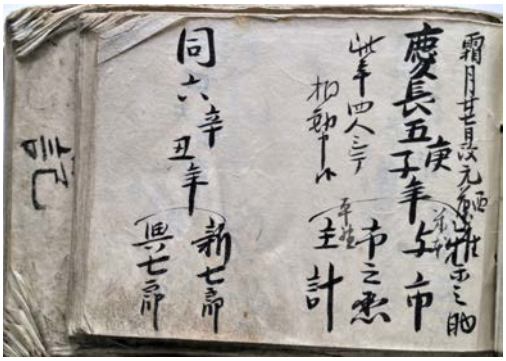
この章では、各地に残されたオビシャの組織の有り様を見ることで、オビシャの枠組み、そしてムラの形の変遷を考えていきましょう。

Ⅳ 儀式の謎① ～歩射と的の文様～

柏市高柳のオビシャの的
高柳区寄贈

関東のオビシャは、実は弓射を行なわないもののほうが多数です。しかし、それでも弓射がオビシャの重要な要素であることは間違いありません。特に特徴的なのは、的の模様です。通常、的といえば思い出す「同心円の的」も勿論ありますが、不思議な絵や文字などさまざまなものが描かれています。それらには、どのような意味があるのか、この章は、関東のオビシャの重要な儀式の一つである弓射について、的の絵柄やそれにまつわる伝説の巻物などを紹介します。

Ⅴ 始まりの謎 ～トウヤが引き継ぐオビシャ文書、400年～



多古町次浦惣態神社の奉社日記
次浦区蔵
写真提供：水谷類

オビシャでは、「オニッキ（お日記）」などと呼ばれる文書に参加者やトウヤの名前などが毎年記され、トウ渡しの席でトウヤから次のトウヤに引き継がれていきます。近年の調査で、こうした文書の中に約400年前頃から現在まで書き継がれているものも確認されるようになりました。そうした文書は「オビシャ文書（もんじょ）」と言われます。

なかには、毎年の村の出来事などを書き加えているものもあり、オビシャの成り立ちや長いムラの歴史を語る一級史料といえます。この章では、そうした新発見のオビシャ文書を一堂に集めました。

Ⅵ 儀式の謎②　～トウ渡しと吉祥の造形～

柏市泉の鳥木（ぼく）
泉鳥備射保存会

関東のオビシャでは「トウ渡し」が最も重要視されますが、これを儀式として成り立たせるためには、それなりのしつらえが必要でした。その場を普段とは違う神聖で華やかな場にするため、おめでたい飾り物や供物が、なくてはならないものでした。

オビシャの供物は、祝いの場を演出し、宴席に臨む人々がめでたさを共有できるように、村人達が自分たちの手で工夫して作る造形物が多いようです。

この章では各地で共通した飾り物や、地域によって特色のある供物をご紹介します。

Ⅶ 村の願いと楽しみ

野田市木間ケ瀬の花嫁行列の面
松ノ木天満宮蔵

年の始まりを仲間と祝う行事として農村部に広まったオビシャ行事。そこには、「ムラの理想の姿が託されています。子孫繁栄・五穀豊穣・家内安全・商売繁盛と、それぞれのムラの願いを体現するための行事が各地で独自に加えられ、オビシャにはさまざまなヴァリエーションが生まれていきました。

厳粛な儀式やしきたりさえも、笑いや遊びに変えてしまう、そんな人々の心のしなやかさが、各地のオビシャの中に見ることができます。

ムラのオビシャが始まったと考えられる、戦国時代から江戸時代は、兵と農が分離し、村の範囲と年貢が定められ、農村部の社会が大きく転換した時代です。次第に形が出来上がっていった近世の新しいムラの新しい仲間が集まって、毎年名前を確認しながら始めた年頭の祭事、それがオビシャの始まりだったのです。

関東のオビシャは、それを行なっている単位が大小さまざまなうえ、年齢順による階層もなく、更に言えば責任者も、組織の名称さえ明確ではない、極めてゆるく平等な家の集まりです。重層的に重なるオビシャがそれぞれに、様々な意味を付加させたトウヤの引き継ぎ儀礼を作り上げ、さまざまなヴァリエーションを生み出したのです。

オビシャという、今現在も引き継がれ続けている行事を、一つずつ紐解いていくことで、中世から近世に、新しいムラの形が自ら立ち上がっていく姿が、そしてその後のムラの400年の歴史が、なんとなく垣間見えてきます。